Ⅰ：宗教現象としてのキリスト教

＜前回＞　キリスト教学の課題と方法

・広義の宗教学における現代宗教学（経験科学としての宗教学）

神学 →　規範概念、宗教哲学　→　本質概念、現代宗教学　→　経験概念

・科学とは何か、あるいは科学はいつ科学となったのか。

・現代宗教学の前提（現代宗教学の科学性・宗教学基礎論）

(1) 現象から原理・構造へ：経験から出発する

(2) 価値中立性：偏見を捨てる・結論を急がない

(3) 全体論：できるだけトータルな視点に立つ

・宗教研究の手続き

「仮説と検証」：仮説　→　データ収集　→　記述・整理　→　分析・理論化

→　検証・仮説の修正

・本講義の仮説

(1) 宗教現象のモデル化（仮説１）

・多様な現象へアプローチするための仮説的モデル

・宗教現象を分析する４つの軸（視点）→４次元モデル

構造／プロセス／レベル／深度

→　宗教現象学、宗教史学、宗教心理学と宗教社会学

宗教人類学（神話・儀礼）：表層と深層

・宗教現象の基本構造（ＳＭＯモデル）：

典型例「キリスト教徒は日曜日ごとに教会で神を礼拝する」

→　「ＳはＭにおいて／Ｍを通してＯを信じる」（「Ｓ－Ｍ－Ｏ」モデル）

(2) 宗教概念（仮説２）

・データ収集の範囲の確定、どこまでが宗教でどこからが非宗教か。

第２講：意味の問いとしての宗教

１　宗教の概念規定の意義

１．宗教現象を学問的に研究しようとする場合、それに先だって、何を具体的に研究対象とするかが明確にされなければならない。これは、現代宗教学に限らず、広義の宗教学全般に妥当する問題であり――顕わな仕方で概念規定がなされていない場合でも、暗黙の内に一定の宗教理解が前提となっている――、宗教研究を首尾一貫した仕方で行おうとするならば、宗教の概念規定の問いを避けて通ることができない（暗黙の前提は、意識化し議論可能な仕方で定式化しておくことが望ましい）。現代宗教学の場合で言えば、「収集すべき宗教現象のデータの範囲は、どこからどこまでか」（仮説２）の問題である。

２．これまで、宗教の概念規定は様々な仕方でなされてきた。とくに、古典的な宗教哲学――近代におけるカント、シュライアマハーらから始まる――においては、宗教概念を本質概念として規定する試みがなされてきた（もちろん、個々の学説は近代よりもはるか以前に遡る）。

(1)「宗教（信仰）とは、蓋然的な知識・認識の問題である」、「真の宗教は合理的な神概念を前提にすべきである」　→　宗教は認識である。

(2)「宗教は倫理的実践の問題である」、「信仰は意志の決断の事柄である」
→　宗教は決断である。

(3)「宗教は感情あるいは情動の問題である」、「信仰は絶対的依存感情である」、「信仰は主観的な気分の問題である」　→　宗教は感情である。
↓

人間の全体性の問い

３．宗教の概念規定をめぐる現代の動向

・還元主義から全体論へ：宗教・信仰を理性や精神の一機能の問題と捉えるのではなく、人間存在の人格性全体の事柄として論じる（次回講義へ）。

・実体概念から関係概念・機能概念へ：実体形而上学批判あるいは本質主義批判（いわゆるホストモダン）に基づく、宗教概念へのアプローチ。家族的類似性としての言語ゲームとしての宗教（ヴィトゲンシュタインに依拠したヒックの議論など）。

２　意味の問いとしての宗教

１．本講義における宗教の概念規定の基本的視点は、「意味の問い」から宗教を見る、というものである。この概念規定（仮説２）は、次の二つの命題に分けて説明できる。

「人間は意味に固執する存在である」＋「人間は本質的に宗教的である」

２．人間の生物学的条件から。

生物学的に見て（進化論）、人間は一般に進化の過程の頂点に位置すると考えられているが、同じことは、「人間はもっとも不完全な動物である」と表現できる。これは、ドイツ啓蒙思想のヘルダーに遡る人間理解であり、20 世紀の哲学的人間学（シェーラー『宇宙における人間の位置』、ゲーレン『人間――その本性および世界における位置』）など）において、詳細に展開された議論である。ポイントは次のようになる。

・不完全さ＝
誕生時の環境適応力の欠如(活動によって自己と世界を構築しなければならない)

・不完全さ＝自由（活動によって自己と世界を構築できる）

・「人間は考える葦である」（パスカル)、「自己－世界」構造の可塑性

３．「象徴を操る動物としての人間」（カッシーラー）

不完全さというハンディキャップを補うために、人間は自らが生きうる世界を構築する。ここに文化的営み（個人的そして共同的）が成立し、それを可能にするのが、人間の「象徴を操る能力」に他ならない。

４．以上よりの結論：「人間は意味に固執する存在である」、意味世界を離れては、人間は生きることができない。

５．象徴を操る能力によって構築された世界（自らの存在意味が確認できる世界、自分ら

しさが確保できる世界）を「意味世界」と定義する。

Q：「行為の意味をいかにして確認するのか？」

意味の三つの相：客観的（意味は体系内の関係である）／主観的（意味は自己の生死に関わる実存的なものである）／相互主観的（意味はコミュニケーション的実在である）

６．では、意味世界はどのような仕方で構築されるのか。

知識社会学（バーガー＋ルックマン）による意味世界（日常的現実）の構築のアウトライン：個人と社会の弁証法、われとわれわれ（自己と共同体）の弁証法プロセス

外在化（表現）／客体化（疎外）・制度化／内在化（社会化）

７．こうして構築されたわたしたち人間の意味世界は次のような特性を持つ。

・意味世界は相対的である。絶対的に正しい意味世界など存在しない。存在するのは、個々の具体的な意味世界のみ（アメリカ人の意味世界、日本人の意味世界、21世紀の京都に生きる人間の意味世界……）。

・意味世界は歴史的あるいは偶然的である。

・意味世界の恣意性・無根拠さ。意味世界は意味世界内部では根拠付け得ない（無限遡及のパラドックスを生じる。自己言及性のパラドックス）。

８．なぜ、宗教なのか。意味世界と宗教との結びつきは、意味世界の恣意性・無根拠さに関わっている。意味に固執する動物である人間が構築する意味世界が実は根拠を欠いているということは、人間は常に無意味性の脅威にさらされているということに他ならない（→無意味性という存在論的な不安）。それだけにいっそう、人間は意味世界を安定化させるものを求める。

９．無根拠な意味世界を安定化させる装置として社会的心理的に生み出されたのが、「意味世界の正当化としての宗教」（なぜに答える、生に意味を与える宗教の機能）である。

バーガーの言う「聖なる天蓋」、あるいはルックマンの「見えない宗教」

10．以上の結論：「人間は本質的に宗教的である」

11．問題：宗教が人間に本質的に備わっているにもかかわらず、どうして、宗教とは無関係な（宗教に無関心な）人間がかくも多く存在し、しかもそれなりに人間らしく生き得ているのか。

↓

再度、宗教とは何か？

12．宗教の概念規定（仮説構築）の基本方針

「広すぎず・狭すぎず」：宗教現象の多様性・広がりと変化を柔軟に捉えることができるだけの広さと、厳密な議論が可能になるだけの狭さ（厳密さ）。常識にとらわれず、しかも常識と矛盾しない。

宗教の普遍性と現実の限定性とは、可能性と現実性という仕方で整理できる。

人間はすべて可能性において常に宗教的であり得るが、その可能性がどのような仕方で現実化するかについてはきわめて多様な仕方が存在し、しかも顕著なあるいは自覚的な仕方では、一生、現実化しないこともあり得る。

13. ティリッヒの宗教論を参照

広義の宗教概念（意味根拠としての宗教・意味世界の正当化としての宗教）と狭義の宗教概念（制度化された既成宗教・常識的な意味での宗教）との区別。

同じ議論は、デューイ（『誰でもの宗教』）による、「宗教」（名詞）と宗教的（形容詞）との区別によっても表現できる。可能性としての宗教は、実体的で固有名詞で表現できる特定宗教（キリスト教、仏教、イスラーム、神道などなど）と文化的意味世界の諸領域において広範かつ多様に見られる「宗教的なもの」（政治運動の宗教性、教育の宗教的次元、倫理の宗教的基盤などなど）のいずれにおいても、現実化する。

＜文献からの引用＞

１．ルター「大教理問答書」（『信条集　前篇』新教出版社　９１頁）

「金と財産をもっている時に、自分では神とあらゆるものとを豊富にもっていると考え、これに信頼して、高慢にも人に対して何とも思わない者が多くある。見よ、このような人はまた、マンモンという名の一つの神、すなわち、金と財産をもっており、彼はそれに自分の全心をおいている。そして、かかるものは地上でもっとも一般的な偶像である。……同様にまた、すぐれた技術・才能・寵愛・友情・名誉、をもっていることに信頼してそれを誇る者も、一つの神をもっているが、それは唯一のまことの神ではない。」

以上の引用においては、「神」が二つの意味で、広義と狭義の両方の意味で使用されていることに注目。

２．キルケゴール『死に至る病』岩波文庫

「人間は精神である。精神とは何であるか？　精神とは自己である。自己とは何であるか？　自己とは自己自身に関係するところの関係である、すなわち関係ということには関係が自己自身に関係するものなることが含まれている、――それで自己とは単なる関係ではなしに、関係が自己自身と関係するというそのことである」、「関係がそれ自身に関係するということになれば、この関係こそは積極的な第三者であり、そしてこれが自己なのである。自己自身に関係するところのそのような関係、すなわり自己、は自分で措定したものであるか、それとも他者によって措定されたかのいずれかでなければならない」。

自己・精神とは、自己関係性（自己参照性、再帰性）において成立する。この関係存在は、存在根拠（原因性）を論じる過程においてパラドックスを生じる。

→　神の存在論証の論理構造

人間存在に普遍的に見られる再帰性と近代特有の再帰性との区別（ギデンズ）

＜発展問題＞

Ｑ：儒教は宗教か？

Ｑ：意味への固執という病理？

意味への固執から解放されたところにむしろ真の意味の実現がある。

「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」（ヨハネ 8.32）

Q：宗教とその意味機能をパラドックスという観点からさらに考える。

「パラドックスの脱パラドックス化」としての宗教を外部観察したときに見いだされるパラドックス（ニクラス・ルーマンの社会システム論を参照）。

＜参考文献＞

１．芦名定道　『キリスト教と現代――終末思想の歴史的展開』（小原克博氏との共著）世界思想社

『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版

２．井門富二夫　『比較文化序説――宗教と文化』玉川大学出版部

３．星川啓慈　『言語ゲームとしての宗教』勁草書房

４．細谷昌志　『文化の深淵としての宗教――宗教的作用論序説』世界思想社

５．金子晴勇　『人間学講義――現象学的人間学をめざして』知泉書館

６．バーガー＝ルックマン　『日常世界の構成』新曜社

７．バーガー　『聖なる天蓋――神聖世界の社会学』新曜社

８．ルックマン　『見ない宗教――現代宗教社会学入門』ヨルダン社

９．カッシーラー　『人間――この象徴を操るもの』岩波書店

『シンボル形式の哲学（一）（二）（三）』岩波文庫

10．アンソニー・ギデンズ　『モダニティと自己アイデンティティ』ハーベスト社